

若いお母さんたちへ

この頃…

はるにれの会 向山陽子

昭和五十七年の秋の終わり、そう、中曾根内閣の誕生と時を同じくして産まれた娘も、四才。幼稚園に、はりきって通うようになりました。

「子どもは一人」「仕事は辞める」「子どもができたのだからこうして……といった類の要求はしない」との夫からの条件をのんで（？）切に望んだ母親となって五年。

冒頭から余談になりますが、五年というの

は、胎内に、わが子を感じてからの年月です。

私は、今でもあの何とも不思議な、体中の全神経が、胎内に集中するような、胎内を保護するような感覚を思っておこすことがあります。又、その感情を思っておこす時、必ず、同時に思っておこすのは、娘が二才近くなつて、はじめて私から離れて、他のおかさんと公園へ遊びにいった時のことです。

この時、私は何ともいえない鈍い痛みを腹部の奥に感じていました。胎内の一部がなくなつてしまつたような、そう、歯を抜いた後、いつまでも意識が、なくなつた歯へ向くような、そんなおちつかない空虚感でした。「これから娘が一人立ちしていくにつれて、何度もこんな空しさを味わうのだろうか」と、その時、思ったものです。

話を戻しましょう。

この五年をふり返つてみると、それまでの夫婦二人だけの生活から、子どもが加わつての三人の生活への変化は、私達夫婦にとつて、予想以上に大きいものでした。

夫にとつては、煙草を吸う事にも気を使い、大好きな車の運転にも気を使い、配偶者の私の第一の関心事は夫ではなく、子どもに移つてしまひ、当の私はそれは当然のことで、そんなことにイライラしているのは父親として育つていないと決めつけてかかつていたのですから。そして子を持たないと決めていた夫の子を持つての責任感、大変なものであつたでしょう。

幼い娘との毎日で必死な私は、そんな夫の思いにまで到底思い及びもせませんでした。

又、私にとつても、仕事を辞めた欲求不満は常にあり、このままでは再就職できないのではといつも焦つていて、本当に娘との時間を楽しんだのは、最初の一二年だけだったのでないでしょうか。次第に、夫の仕事が忙しくなり、夫の世界が、私の全く知らない所へ広がつていき、私への関心が薄くなつていくことへのあせり、自信喪失——私自身の夫への関心が、子どもにとつてかわつてゐることは棚に上げて——。

そんなイライラは、娘との関わりにきつと影響してい

たでしょう。

子を胎内に感じてから五年。

迂余曲折を経て、やっとこの頃、親子三人の生活が根づいてきたなと思えるようになってきました。

あいかわらず、主人は忙しく帰りは深夜、長期出張の多い母子家庭同然の毎日ですが、私自身が心安らかに、昼間の娘との生活を楽しめるようになってきたのです。

何故、今、こんなにも、安らかでいられるのか、娘にも「やさしくて、きれいなおかあさん」と言ってもらえるようになったのか。

この紙面に書かせていただく機会に、ふり返ってみようと思います。

この紙面に書かせていただくたびに、自分にむきあう機会を与えていただきました。他のはるにれの方々は、ご自分と、お子さんのことを書いておられるのに、私だけ、夫との葛藤などを書いて……と自己嫌悪に陥ったこ

ともありません。が、私の場合、娘とのことを考える時、私と夫との葛藤ぬきでは、語れなかったようです。

そして、私の他にも、子育て中の方で、ご自分とご主人との事、又、ご主人とお子さんの事で、悩んでいる方が、なんとたくさんいらっしゃるのか。

しかし考えてみると当り前のことで、夫婦がいて、子がいて、それにつながるさまざま人間関係で、世の中が成り立っているのですものね。

娘であった一女性が、妻になり、母親になっていくにつれ、悩みも、考えることも変化していくのですものね。

仕事を辞めて地域に浸って三年。

私は地域の子育て仲間恵まれました。

いい方ばかりです。でも、どの方も、何かしら「不安」を抱いていました。ご主人のこと、お子さんとのこと、お姑さんとのこと、年老われた親ごさんをめぐってのこと——他に発散する場所のない私達は、子どもを遊

ばせるために集まった公園で、ブツブツと愚痴をこぼしはじめていました。

最初は、深いところまで話せる仲ではありませんでしたが、どの家族も子どもが増え、子どもが成長するにつれ、又、ご主人の仕事が忙しくなってくるにつれ、母親であり、妻である私達は、いろいろ悩み、家の中のことまで話し、相談するようになっていました。

幸い、私達は、住環境は、社宅でもなく同じマンションでもなく、一戸建てであり、間借りあり、マンションあり……又、それぞれの家が、近くて四〇五軒先、遠いお宅は、大きな道路を隔てた先にあたりで、公園を中心に集まり、子ども達を思う存分に遊ばせることが目的の母親が集まっていました。

ですから、それぞれの生活を侵害しない程度に、距離を保つことができました。私達自身の悩みを口にすることで、発散も出来、又、言葉にすることで、自分自身の思いを整理することにもなり、聞く側にとっても、大なり小なりいずれば、自分の家族の問題にもなり得ること

ばかりなので、親身になって聞いてもらえました。

私は、この、地域の子育て仲間、ずいぶん、救われました。

人の話を聞いたり、人の子どもへの接し方を見ることで、自分自身に気づき、反省することも多く、妻として母親として成長させてもらいました。

特に、子どもとの接し方については、皆が子ども側に立って、気づいたことを暖かく忠告してくれるのです。

母親が子どもの全てを知っているわけではありません。子どもも三才、四才になると、母親のいないところで、例えばおともだちの家で、母親の知らない面をちらっと、見せたりするものです。

子どもは大好きなおかあさんに愛されたいので、おかあさんの期待にこたえようとします。けなげにも……。

母親の知っている我が子の姿はある一面にすぎないことが多いいのです。

ですから、母親のいない時、暖かく見守ってくれる人が他にいることは、そして、子どもの立場に立って、母親に忠告してくれる人が地域にもいることは、本当でありがたいのです。

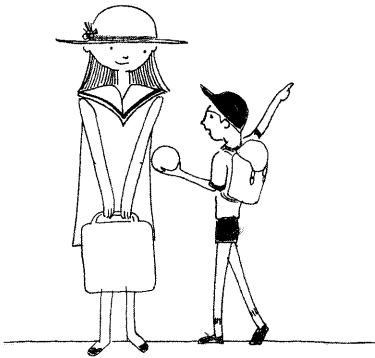
私達は「自分のことは見えないが、人のことならよくわかる」といって、自分のことは棚に上げさせてもらって、互いに、母親としての成長を促しあってこれしました。

例えば 私の場合、

何号か前に書いたものと重なるのですが、娘の入園前の冬、私は一日三時間の非常勤の仕事に出ていました。往復の時間を入れ約五時間、娘を地域の仲間に託して……

子育て仲間達は、私自身の再就職への焦りも知っていましたが、「いってらっしゃい。Mちゃんは、今までどおり遊んでいきましょう」と言ってくれました。

順調に、娘もそんな生活を楽しんでいるようにもみえましたが、三カ月すぎた頃から、帰ってみると、娘は、



他のおかあさんに抱っこされている日が多くなり、私がいない間の娘の様子を報告してくれる中に「がんばっているわよ」がまんしているわよ」が多くなり、ある時「誰かのおかあさんに、びったりくっついてお友達とは遊べなくなってきたわよ」と忠告を受けました。

その様子はうすうす感じてはいたものの、私と娘との会話の中では、「明日は○○のおうちがいい。おかあさんはお仕事いいよ」と言っていた娘でしたから、母親にとっていい子になろうとしている娘の心を思うと涙の出る思いでした。

仕事はともやりがいがあり、職場の方々も素敵な方ばかりで、私だけにとってみれば、やり続けたい仕事ではありました。

四月以降、産休代替の常勤にもつきましたので、娘以上に私も楽しみにしているH幼稚園を諦めてでも、続けるかと迷いもしましたが、母親にとっていい子になるうとしている娘の心を知らされて、娘が楽しみにしているH幼稚園まで、私の勝手にとり上げてはいけけない、

と、三月まで勤めさせていただき、四月以降の常勤は、若い方にひきつぐことにいたしました。

この四ヶ月の経験は、母親としても、いつかは又子ども達のいる現場での職に就きたい私としても、貴重な経験でした。

この四ヶ月を支えてくれ、日々の迷いを一緒に語りあってくれた地域の子育て仲間には、本当に感謝しています。

「お仕事しているおかあさんの方が優しいな」とまで娘に言わせた、四ヶ月前の私にあった再就職への焦りも、なくなりました。

焦っているばかりでなく、今、何をして再就職への準備をすればいいのが、具体的に見えてきたからでしょう。

その一つは、望んだH幼稚園へ、娘とともに通い、娘の成長をこの目で見、母親としての自分の成長を体験していくことでしょう。

又、一つは、地域の児童館での三才児の保育のお手伝いと、おもちゃの部屋の活動を、仲間と共に続けていくことでしよう。

この二つは私に栄養とエネルギーを与えてくれるに違いないありません。

そして、又十年間の家庭生活の整理整頓です。共稼ぎ、子育てで積もりに積もった家の中の、物質面、精神面の「お荷物」を、シンプルにしないことには、来る四十才代、五十才代を勤めを持ちながらは、のり越えられないでしょうから。

地域の子育て仲間のお子さん達も、娘と同年齢のお友達は、四つの幼稚園、保育園へそれぞれ入園しました。

そして今日も、園から帰って休んだ後、いつもの公園で、いつものように、水で、砂で、すべり台で、ブランコで、いくつかのグループにわかれたり、くっついたり、追いかけたり、キャーキャーいいながら、十人ほどで遊んでいます。回りのベンチでは、ヨチヨチ歩きの下

のお子さんを見守りながら、いつものように、子育て談議がはじまっています。

この子育て仲間にも、一部の方々が近づきすぎて、息苦しくなり、うまくいかなかったこともありました。

幼稚園、保育園を選ぶ段階で、今までの子育てに自信がなくなってしまった方もありました。

私のように、急に、娘を預け、勤めに出してしまう者もありました。

どんな時も、子ども達はいつもと変わらず遊び続けられるようにと、力を出しあい、場所を提供しあい、支えあってこれました。

引越していった方達も、人形劇や、遠足の予定を組むと、必ず姿を見せてくれます。

これからも幼稚園、保育園は別でも、私達母親が誰かに話したくなった時、相談したい事ができた時、この小さな公園に集まって来れるようにしたいと思います。

子育て仲間の下のお子さん達が今まさに、泥ンコ時

代。公園へいけば、きっと誰かがいます。

それぞれの園のことも、距離を保てるこの仲間となら、又幼い頃共に遊ばせたこの仲間となら話せそうです。

そういえば娘がヨチヨチ歩きの頃、このあたりはまだまだ大きな木がたくさん残っていました。

今、どんどん、大きな木は切り倒され、キャベツ畑もなくなり、宅地へ、テニスコートへ、駐車場へとかわっていきます。

昨日も、砂遊びをしていた公園の隣りで、ブルドーザーが、大きな標をなぎ倒していました。

「かわいそうだね、木さん。お水のめなくなっちゃやね。」

「いたそうだね」

「せっかく大きくなったのにな」

「どこへいっちゃうんだらうね」

「やきいもできなくなるね」

四才の娘達の会話です。

きっと私達には手の届かない値段の家が建つのでしよう。

今、娘達が児童館へいくためには、環状道路を横断しなくてはなりません。いつも車が渋滞していて、娘達が渡る横断歩道の上に大きなダンブカーが停まったきりで、信号さえ、見えない状態は、しょつ中です。

娘が産まれた時、ここは雑木林でした。

そう、その児童館でも、今年度から区が障害児関係から手を引き、職員が二人減りました。

仲間と続けようとしている「おもちゃの部屋」は転勤していった職員が「障害児と健康児が共に遊べる場所に」と、はじめた活動です。私たちは彼らの「細々とでも続けて、区にこういう活動が、地域では必要なことを訴えていきたい」との熱い思いをうけつこうとしています。

こうしてこのわずか五年の地域の変化をみただけでも、私達母親は、しっかりと地域に根ざして生活し、子



ども達を家族を守らなければ……と思えてきます。

再就職への私の焦りも、これらの変化と無関係ではなかったようです。

私の今の安らかな状態は、娘達の入園をきっかけに、母親として、妻として、地域住人としての自分をはっきりと意識して、成長していけそうな予感がするからでしょうか。

先日、ドイツから一時帰国されている、H幼稚園の園長先生は「人の目をおそれることなく、天をおそれよ。濁流の中に身をおこうとも、心の中に一筋の清流をもつ人間になれ」と、話してくださいました。

胎内に我が子を感じてから五年、  
親子三人で安らかに互いの成長を喜びあって生活していけそうです。

妻であり、母親である私の心が、こんなにも晴れやかなのですから。

——お知らせ——

二十六回の長きにわたり「幼児の教育」に連載された「近代短歌に現われた子ども」が、この度「短歌の中の子ども」とタイトルを変え、一冊の本にまとめられました。お茶の水女子大学の教授をつとめられた大塚雅彦先生の作品で、連載時より、多くの読者に深く愛されたものです。

日本の激動期ともいえる明治、大正、昭和。その様々な社会状況の中に生きる人々の心情を、子どもを通し短歌に著わした歌人たち。親と子の結びつきを鮮明に短かい言葉の中に集約しています。大塚先生の作品は、単なる短歌の解説ではなく、長年、東京家裁首席調査官をなさった先生の眼を通し、より人間臭い、そしてより切迫したものになっているようです。

桜楓社 一九〇〇円